

## ムッシュー・グルジェフの余分な労働

### (チェスラヴ・チェコヴィッチの回想録より)

この回想録で、私はつねに私的な意見を交えずに物事を語ろうと努めて来たが、それがどれほど難しいかを思い知らされている。これらすべての話との関係で、私が自分の師として敬愛する人物の本質にあるものが「自己犠牲」であることは明白なのだが、読者がどんなふうと思うかということを考えると、はたしてこんなふうに言ってよいのだろうか？ この疑問は私のなかにずっと残るだろう。

私をひどく動揺させたある出来事について話したい。私がひどく動揺したのは、これはムッシュー・フルジェフの健康に関わることだったからだ。これは1948年、彼がなくなる一年ほど前に、Rue de Colonels Renardにある彼のアパートマンで起きたことである。

老齢のうえ、容赦ない病の進行に苦しめられていたが、ジョルジヴァンチ[グルジェフ]は、ますますおおぜいの生徒たちに囲まれ、そして彼らは当然のごとく、いろいろな状況でいろいろなサービスを受けていた。彼の生涯はもうすぐ終わるのではないかと感じて、アメリカやイギリスなど各地から、彼を慕う者たちがインド風に言うなら「ダルシャン」を求めて押し寄せてきた。彼は持ち前の気前よさをもって彼らをもてなし、だれもが晚餐に加われるように配慮した。彼のアパートマンの小さなダイニングルームで食卓を囲む人たちの数が五～六十人にまでならない日はまずなかった。

どれだけの数の皿を洗わなければならなかったか、想像していただきたい。ひとりあたり三～四皿、サラダ用とスープ用とデザート用のスプーン、そしてもちろんフォークとナイフ。盛り皿、グラス、カップ。平鍋、深鍋、フライパン。毎日、皿洗いは延々と続いた。専門のチームが編成され、使用済みの食器類を洗い、ダイニングルームへと手早く戻した。自慢するわけではないが、私がこのチームを率いているあいだ、これはとてもうまくいっていた。

ところがある日、ジョルジヴァンチは、今後けっして皿洗いはしないようにと、私にはっきりと言い渡した。だが、素人だけでこれをすると、きれいな皿を用意する前に直前のコースからの汚れた皿が戻ってきてしまいがちで、それを見かねた私は、晚餐の終わるまで皿が不足することがないように、こっそり彼らを手伝っていた。皿洗いを担当するメンバーは晚餐の直前に決まるので、作業にとまどい、遅れが生じるのは避けられなかった。ムッシュー・グルジェフは私を見張っていて、ある日とうとう、皿を洗っている現場を見られてしまった。あまりきつく叱られたので、これからはけっして言いつけにそむくまいと思った。それから二日間、私は我慢してキッチンに近づかないようにした。ところが三日目には、六十八人ものお客がぞろぞろ客間に入っていきのだった。

夜遅く、来訪者の最後のひとりが帰った後、私は遠くからキッチンのほうに目をやった。私の仲間が三人、山積みになった食器とフォーク類、鍋やフライパンを相手に格闘していた。ここは奴隷の仕事場か？ これはもう見ていられない。私は手伝いだした。そこに突然、ムッシュー・グルジェフが登場した。

彼はみんなに、もう家に帰れ、と命令した。私はもう懇願するような声で、私はあと少しだけ残らせてもらえないかと尋ねた。彼は反論を許さない強い口調で、私にも帰るように言った。翌日の昼食には六十人が招かれている……私はそれについて考えずにはいられなかった。もう午前一時半だった。午前九時にもならないうちに、キッチンがフル回転である。私はしつこく、早朝にまたやってきて、そのときに皿洗いを済ませてよいかと尋ねた。彼は無言でドアを指差した。私は、早朝にまた来ると誓ったうえで、ようやく彼の家を出た。

まだ心配しながら、朝の六時半に彼のアパートマンに引き返したが、彼を起こしたくはなかったので、途方にくれた。ドアに耳をつけて様子をうかがうと、一分もしないうちに、なじみ深い彼の足音が内廊下に響くのが聞こえてきた。ノックすると、足音は近づいてきた。

「だれかな？」

彼はドアを開けると、とぼけた声で、「こんな早朝に訪ねてくるなんて、いったいどうしたんだ？」と言う。

「ジョルジヴァンチ、そんなにしらばっくれしないでください。キッチンがめちゃくちゃじゃないですか。朝早く片付けにくるときのあの晩に約束しました」

「それはありがとう」と彼は言い、自室に戻っていった。

私は急ぎ足でキッチンに行き、そこで気絶しそうになった。ぜんぶ片付けられている。すべて完璧だった。私は彼の声を聞いた。

「チェスラヴ、いっしょにコーヒーを飲もうか」

だれがこの仕事をしたのか、彼は教えてくれなかった。だが、彼がひとりでしたのに違いない。(これは後から確認した。)

私は不安になり、その日あとから、この一部始終をマダム・ド・ザルツマンに話した。彼女の美しい顔から血の気が引いていった。それを見て、私はますますぞっとした。またもや彼は、夜の眠りと休息を断念したのだ。だれのためにこんなことをするのか？ まさか私のため？ […]

(Tchesslav Tchechovitch, *Tu L'Aimeras - Souvenirs sur Georgii Ivanovitch Gurdjieff*, p. 223-225)